

(他)

国民年金
厚生年金保険
船員保険
共済年金

診 断 書

(血液・造血器の障害
その他)

様式第120号の7

1級該当
認定事例

(フリガナ) 氏 名		〇 〇 〇 〇		生年月日	昭和 平成	46 年 9 月 23 日生 (45 歳)	性別	男・女	女
住 所		住所の郵便番号 〇〇〇-〇〇〇〇		東京 都道府県		千代田 市区	霞ヶ関 1-2-2		
① 障害の原因 となった 傷 病 名		脳脊髄液減少症		② 傷病の発生日		昭和 平成	25 年 11 月 1 日	後発録で確定 本人の申立て (年 月 日)	
④ 傷病の原因 又は誘因		不詳 初診年月日 (昭和・平成 年 月 日)		⑤ 既存 障害		なし		⑥ 既往症	
⑦ 傷病が治った(症状が固定して治 療の効果が期待できない状態を含 む。)かどうか。		傷病が治っている場合 …… 治った日 平成 年 月 日		確 認 推 定		傷病が治っていない場合 …… 症状のよくなる見込		有 ・ 無 ・ 不明	
⑧ 診断書作成医療機関 における初診時所見 初診年月日 (昭和・平成) 25 年 11 月 13 日		11月1日以降、起きているときの頭痛をはじめとして、体のあちこちの痛みやだるさがあり、いっこうに改善しないこ とから受診。頭痛(起立性)、頸部痛、背部痛、めまい、ふらつき、全身の倦怠感などがあつた。ほぼ1日中 臥床の状態。							
⑨ 現在までの治療の 内容、期間、経過、そ の他参考となる事項		臥床安静を指示し、点滴治療を行うも改善なし。MRI・脳槽シンチグラ フィー・CTミエログラフィーによる精査の結果、髄液漏出を認める。ブラッド パッチを2回行ったものの軽快せず、症状は残存している。		診療回数		年間 10 回、月平均 0.8 回		手術歴	
⑩ 現状の症状、その他 参考となる事項		起立性の頭痛、頸部痛、背部痛、易疲労が著明。立位にて症状が悪化する。		手術名		ブラッドパッチ (27 年 4 月 8 日)		手術年月日 (26 年 5 月 11 日)	
⑪ 計 測		身長		体重		現在 kg		健康時 kg	
視 野		調節機能		聴力レベル		最良語音明瞭度		聴 力	
右眼		裸眼		矯正		右眼		裸眼	
左眼		裸眼		矯正		左眼		裸眼	
右耳		dB		%		最大		mmHg	
左耳		dB		%		最小		mmHg	
⑫ 一 般 状 態 区 分 表 (平成 27 年 6 月 8 日) (該当するものを選んでどれか一つを○で囲んでください。)									
ア 無症状で社会活動ができ、制限を受けることなく、発病前と同等にふるまえるもの									
イ 軽度の症状があり、肉体労働は制限を受けるが歩行、軽労働や座業はできるもの 例え、軽い家事、事務など									
ウ 歩行や身のまわりのことはできるが、時に少し介助が必要なこともあり、軽労働はできないが、日中の50%以上は起居しているもの									
エ 身のまわりのある程度はできるが、しばしば介助が必要で、日中の50%以上は就床しており、自力では屋外への外出等がほぼ不可能となったもの									
オ 身のまわりのこともできず、常に介助を必要とし、終日就床を強いられ、活動の範囲がおおむねベッド周辺に限られるもの									
障 害 の 状 態									
⑬ 血液・造血器 (平成 年 月 日現症)									
1 臨床所見					2 血液検査成績 (平成 年 月 日)				
(ア) 自覚症状					(イ) 末梢血液				
疲労感 (無・有・著)					赤血球 × 万/μl				
動悸 (無・有・著)					ヘモグロビン濃度 g/dl				
息切れ (無・有・著)					ヘマトクリット %				
発熱 (無・有・著)					白血球 /μl				
関節症状 (無・有・著)					顆粒球 /μl				
易感染性 (無・有・著)					単球 %				
(イ) 他覚所見					リンパ球 /μl				
リンパ節腫脹 (無・有・著)					病的細胞 %				
出血傾向 (無・有・著)					顆粒球(G)と赤芽球(E)との比 (G/E)				
紫斑 (無・有・著)					(ウ) 出血傾向				
肝腫 (無・有・著)					出血時間 (法) 分				
脾腫 (無・有・著)					A P T T (基準値 秒) 秒				
3 輸血の回数及び総量					(エ) その他				
回 計 ml					CRP 検査値				
(平成 年 月 日～平成 年 月 日)					LDH 施設基準値				
4 凝固因子製剤輸注の回数及び量					検査値				
回 計 ml									
(平成 年 月 日～平成 年 月 日)									
5 造血幹細胞移植					6 その他の所見				
無・有 (平成 年 月 日)									
経過 (									

「診療録で確認」または「本人の申立て」のどちらかを○で囲み、
本人の申立ての場合は、それを聴取した年月日を記入してください。

(お願い) 本文の欄は、記入漏れがないように記入してください。

本人の障害の程度及び状態に無関係な欄には記入する必要はありません。(無関係な欄は、斜線により抹消してください。)

1	檢 查 成 績
---	---------

检查项目	检查
------	----

(現症日以前の4週間以上の間隔をおいて実施した連続する直近2回の検査結果を記入し、一番右の欄にはその平均値を記入してください。)

(現症日以前の4週間以上の間隔において実施した連続する直近2回の検査結果を記入してください。)

①1日1時間以上の安静臥床

- | | |
|---------------|------------------|
| 4 エイズ発症の既往の有無 | 5 回復不能なエイズ合併症のため |
|---------------|------------------|

☐ 代謝異常 ☐ リポアトロフィー ☐ 肝障害 ☐ 腎障害 ☐ 精神障害 ☒ 神経障害

- ☐
- その他(薬剤名、服薬状況及び副作用の状況)

(1) 検査所見 (2) 臨床

- | | | | | |
|--------------------|---|---|---|-------------------------|
| 食道静脈瘤 | 無 | ・ | 有 | (内視鏡による、X線造影による、その他()) |
| 肝硬変 | 無 | ・ | 有 | (代償性、非代償性) |
| 肝細胞癌 | 無 | ・ | 有 | |
| 肝性脳症 | 無 | ・ | 有 | (1年以内に発症したことがある) |
| 腹水 | 無 | ・ | 有 | ・ 著 |
| 消化管出血 | 無 | ・ | 有 | (1年以内に発症したことがある) |
| ビリルビン値の上昇をきたす薬剤の使用 | 無 | ・ | 有 | |

1	症 状
---	-----

(1) 自覺症

(1) 血液·生化学

抄本口

(1) 人工肛门

-

現症時の日常生活活動

予 後

考
論

平成 27 年 6 月 20 日

診療担当科名 脳神経外科

醫師氏名 ○ ○ ○ ○

印

<脳脊髄液減少症 1 級>

(付 記)

- 本例は、初診日が平成25年11月13日であるので、障害認定日は1年6月後の平成27年5月13日となる。

この診断書の障害の状態は、平成27年6月8日現症のもので、障害認定日以降3月以内の診断書であるので、障害認定日の障害の状態はこれで確認できる。

- 傷病は脳脊髄液減少症であるので、診断書⑧～⑩、⑫、⑮1、⑯、⑰欄は必ず記載されていなければならない。
- 医師から、日常生活に関する指導が行われている場合は、⑨欄にその内容を記載してもらうこと。
- ブラッドパッチ等が行われている場合は、⑨「手術歴」欄に記載してもらうこと。
- 脳脊髄液減少症に関する検査が行われている場合は、⑮1(2)欄に検査の内容と結果を記載してもらうこと。
- ⑯欄には、どのようなことに生活の不自由さが生じ、他人の介助・援助を要しているか、日中どのくらい就床しているか等、日常生活の状況や労働能力について、できるだけ詳しく記載してもらうこと。

■ 認 定

検査の結果、脳脊髄液の漏出が認められたため、ブラッドパッチを行ったものの、起立性の頭痛をはじめとした症状が残っている。一般状態区分が才であり、日常生活活動能力が歩行困難というだけでなく、食事や排せつも他人の介助がないと困難な状態となっており、ほぼ終日就床して過ごしていることから、「日常生活の用を弁ずることを不能ならしめる程度のもの」に該当すると認められるので、1級9号と認定される。

(他)

国民年金
厚生年金保険
船員保険
共済年金

診 断 書

(血液・造血器の障害
その他)

様式第120号の7

2級該当
認定事例

① 障害の原因 となった 傷病名	脳脊髄液減少症	② 傷病の発生年月日	昭和 23 年 9 月 9 日	③ ①のため初めて医 師の診療を受けた日	昭和 23 年 9 月 9 日	④ 傷病の原因 又は誘因	不詳 初診年月日 (昭和・平成 年 月 日)	⑤ 既存 障害	なし	⑥ 既往症	なし	
⑦ 傷病が治った(症状が固定して治 療の効果が期待できない状態を含 む。)かどうか。	傷病が治っている場合 …… 治った日 平成 年 月 日 確 認 推 定 傷病が治っていない場合 …… 症状のよくなる見込 有 ・ 無 ・ 不明											
⑧ 診断書作成医療機関 における初診時所見 初診年月日 (昭和・平成 25 年 6 月 20 日)	症状:起立性頭痛、嘔気、めまい、頸部痛、倦怠 他院での髄液圧測定は2回とも低位(0cmH ₂ O)											
⑨ 現在までの治療の内 容、期間、経過、その 他参考となる事項	H25.7.2~7.8入院。髄液圧4cm水位。CTミエロで頸・腰推で髄液の もれが見つかり、ブラッドパッチを施行。効果乏しく、H26.4.11とH27.4.11 に人工髄液注入を行ったが、効果見られず。											
⑩ 現状の症状、その他 参考となる事項	頭痛、頸部痛、背部痛、易疲労が著明。立位にて症状が悪化する。											
⑪ 計 測	身長	体重	現在 kg 健康時 kg	握力	右 左 kg kg	視力	右眼 裸眼 左眼 裸眼	矯正 矯正	聴力レベル	最良語音明瞭度	聴力	最大 mmHg 最小 mmHg
(平成 年 月 日)	視野	調節機能	右耳 dB 左耳 dB	%	%	聴力	聴力	聴力	聴力	聴力	聴力	聴力
⑫ 一 般 状 態 区 分 表 (平成 28 年 4 月 7 日) (該当するものを選んでどれか一つを○で囲んでください。)	ア 無症状で社会活動ができ、制限を受けることなく、発病前と同等にふるまえるもの イ 軽度の症状があり、肉体労働は制限を受けるが歩行、軽労働や座業はできるもの 例えば、軽い家事、事務など ウ 歩行や身のまわりのことはできるが、時に少し介助が必要なこともあり、軽労働はできないが、日中の50%以上は起居しているもの ○ 身のまわりのある程度はできるが、しばしば介助が必要で、日中の50%以上は就床しており、自力では屋外への外出等がほぼ不可能となったもの オ 身のまわりのこともできず、常に介助を必要とし、終日就床を強いられ、活動の範囲がおおむねベッド周辺に限られるもの											
障 害 の 状 態												
⑬ 血液・造血器 (平成 年 月 日現症)	1 臨床所見 (ア) 自覚症状 疲 労 感 (無・有・著) 動 悸 (無・有・著) 息 切 れ (無・有・著) 発 熱 (無・有・著) 関 節 症 状 (無・有・著) 易 感 染 性 (無・有・著) (イ) 他覚所見 リンパ節腫脹 (無・有・著) 出血傾向 (無・有・著) 紫 斑 (無・有・著) 肝 腫 (無・有・著) 脾 腫 (無・有・著) 2 血液検査成績 (平成 年 月 日) (ア) 末梢血液 (イ) 骨 髄 赤 血 球 ×万/μl 有 核 細 胞 ×万/μl ヘモグロビン濃度 g/dl 巨 核 球 /μl ヘマトクリット % 赤 芽 球 % 白 血 球 /μl 顆 粒 球 % 顆 粒 球 /μl リ ン 巴 球 % 単 球 % 病 的 細 胞 % リ ン 巴 球 /μl 病 的 細 胞 % 病 的 細 胞 % 顆 粒 球(G)と赤芽球(E)との比(G/E) 血 小 板 ×万/μl (ウ) 出血傾向 網赤血球数 % 出血時間 (法) 分 血清総蛋白 g/dl A P T T (基準値 秒) 秒 (エ) その他 CRP 検査値 LDH 施設基準値 検査値											
3 輸血の回数及び総量	回 計 ml (平成 年 月 日~平成 年 月 日)											
4 凝固因子製剤輸注の回数及び量	回 計 ml (平成 年 月 日~平成 年 月 日)											
5 造血幹細胞移植	無・有 (平成 年 月 日) 経過 (											
6 その他の所見												

「診療録で確認」または「本人の申立」のどちらかを○で囲み、
本人の申立の場合、それを添付した年月日を記入してください。

(お願い) 太文字の欄は、記入漏れがないように記入してください。

本人の障害の程度及び状態に無関係な欄には記入する必要はありません。(無関係な欄は、斜線により抹消してください。)

1	檢 查 成 績
---	---------

検査項目	検査日	単位	.	.	.	平均値
------	-----	----	---	---	---	-----

(現症日以前の4週間以上の間隔において実施した連続する直近2回の検査結果
記入し、一番右の欄にはその平均値を記入してください。)

(現症日以前の4週間以上の間隔において実施した連続する直近2回の検査結果記入してください。)

①1日1時間以上の安静臥床を必要とするほどの強い倦怠感及び

- | | | | |
|---|-------------|---|----------------|
| 4 | エイズ発症の既往の有無 | 5 | 回復不能なエイズ合併症のため |
|---|-------------|---|----------------|

☐ 代謝異常 ☐ リポアトロフィー ☐ 肝障害 ☐ 腎障害 ☐ 精神障害 ☐ 神経障害

- _____

介助なくしては日常生活がほと
んど不可能な状態である

介助なくしては日常生活がほと
んど不可能な状態である。

(1) 検査所見 (2) 臨床所見

検査日	単位	.	.	.	.
-----	----	---	---	---	---


 The logo of the National Center for Human Genome Research, featuring a stylized DNA double helix and the text "National Center for Human Genome Research".

- (※ ビリルビン値の上昇をきたす薬剤の使用 無 ・ 有)

1 症 状

1) 自覚症状

(1) 血液·生化学検査

[illegible]

(1) 人工肛門造設 無・有 造設年月日: 平成 年 月 日 (4) 自己導尿の常時施行 無・有 開始年月日: 平成 年 月 日

-
- | Year | Total (%) | Male (%) |
|------|-----------|----------|
| 1950 | ~10 | ~8 |
| 1960 | ~11 | ~9 |
| 1970 | ~12 | ~10 |
| 1980 | ~13 | ~11 |
| 1990 | ~14 | ~12 |
| 2000 | ~15 | ~13 |
| 2010 | ~16 | ~14 |
| 2020 | ~17 | ~15 |
| 2030 | ~18 | ~16 |
| 2040 | ~18 | ~16 |
| 2050 | ~18 | ~15 |

(17)

⑮

病院又は診療所の名称 ○ ○ 産 院 診療担当科名 脳神経外科

醫師氏名 ○ ○ ○ ○ 印

<脳脊髄液減少症 2級>

(付 記)

- 本例の初診日は、平成23年9月9日で、障害認定日当時の障害の状態が国年令別表及び厚年令別表第1に該当しなかったが、その後障害の程度が悪化したため事後重症として請求してきたものである。
- この診断書の障害の状態は、平成28年4月7日現症のもので、裁定請求日(※ここでは平成28年6月1日と設定)以前3月以内の診断書であるので、裁定請求日の障害の状態はこれで確認できる。
- 傷病は脳脊髄液減少症であるので、診断書⑧～⑩、⑫、⑮1、⑯、⑰欄は必ず記載されていなければならない。
- 医師から、日常生活に関する指導が行われている場合は、⑨欄にその内容を記載してもらうこと。
- ブラッドパッチ等が行われている場合は、⑨「手術歴」欄に記載してもらうこと。
- 脳脊髄液減少症に関する検査が行われている場合は、⑮1(2)欄に検査の内容と結果を記載してもらうこと。
- ⑯欄には、どのようなことに生活の不自由さが生じているか、日中どのくらい就床しているか等、日常生活の状況や労働能力について、できるだけ詳しく記載してもらうこと。

■ 認 定

検査の結果、脳脊髄液の漏出が認められたため、ブラッドパッチ等を行ったものの、症状が改善せず、起立時の頭痛をはじめとする症状が残存した状態。一般状態区分はエであり、日常生活活動能力より、家事を行うのが難しく、一人で外出できずに買い物が困難な状態であることや、日中の50%以上は就床している状態であることなどから、「日常生活が著しい制限を受けるか、又は日常生活に著しい制限を加えることを必要とする程度のもの」に該当すると認められるので、2級15号と認定される。

(他)

国民年金
厚生年金保険
船員保険
共済年金

診 断 書

(血液・造血器の障害
その他)

様式第120号の7

3級該当
認定事例

(フリガナ) 氏 名	〇 〇 〇 〇 〇 〇	生年月日	昭和 平成	61 年 11 月 11 日生 (30 歳)	性別	男・女											
住 所	住所の郵便番号 〇〇〇〇-〇〇〇〇	東 京 都 府 県	千 代 田 市	霞ヶ関 1-2-2													
① 障害の原因 となった 傷 病 名	脳脊髄液減少症		② 傷病の発生日	昭和 平成	24 年 11 月 頃 日	診療録で確認 本人の申立て (25 年 1 月 22 日)											
③ ①のため初めて医 師の診療を受けた日	昭和 平成	25 年 1 月 22 日	診療録で確認 本人の申立て (年 月 日)														
④ 傷病の原因 又は誘因	不詳	初診年月日 (昭和・平成 年 月 日)	⑤ 既存 障害	なし	⑥ 既往症	なし											
⑦ 傷病が治った (症状が固定して治 療の効果が期待できない状態を含 む。)かどうか。	傷病が治っている場合 …… 治った日 平成 年 月 日 確 認 傷病が治っていない場合 …… 症状のよくなる見込 有 ・ 無 ・ 不明																
⑧ 診断書作成医療機関 における初診時所見 初診年月日 (昭和・平成 25 年 1 月 22 日)	起立性頭痛、肩こり、背部痛、倦怠感 (易疲労)、睡眠障害、集中力低下、記憶力低下、 ボーッとする、読字困難 など																
⑨ 現在までの治療の内容、期間、経過、その他 他参考となる事項	外来診察での点滴及び投薬加療。右記入院によるブラッドパッチ治療 (髄液漏れをふさぐ目的で実施)や人工髄液の髄液腔内注入。症状 はやや改善の傾向を示した。			診療回数	年間 3 回、月平均 0.25 回	手術名 (①ブラッドパッチ②人工髄液注入) ① 25 年 2 月 18 日 手術年月日 (② 26 年 2 月 14 日)											
⑩ 現状の症状、その他 参考となる事項	頭痛、肩こり等、初診時の症状はすべて残存している。																
⑪ 計 測	身長 cm	体重 kg	現在 健康時	kg	握力 kg	右 左	視力 kg	右眼 裸眼	矯正	左眼 裸眼	矯正	聴力 dB	右耳 左耳	聴力レベル	最良話音明瞭度 %	最大 最小	mmHg mmHg
(平成 年 月 日) 完	視野	調節 機能	右耳 左耳	dB	dB	聴力レベル	最良話音明瞭度 %	最大 最小	mmHg mmHg								
⑫ 一 般 状 態 区 分 表 (平成 26 年 7 月 26 日) (該当するものを選んでどれか一つを○で囲んでください。)																	
ア 無症状で社会活動ができ、制限を受けることなく、発病前と同等にふるまえるもの																	
イ 軽度の症状があり、肉体労働は制限を受けるが歩行、軽労働や座業はできるもの 例え、軽い家事、事務など																	
ウ 歩行や身のまわりのことはできるが、時に少し介助が必要なこともあり、軽労働はできないが、日中の50%以上は起居しているもの																	
エ 身のまわりのある程度はできるが、しばしば介助が必要で、日中の50%以上は就床しており、自力では屋外への外出等がほぼ不可能となったもの																	
オ 身のまわりのこともできず、常に介助を必要とし、終日就床を強いられ、活動の範囲がおおむねベッド周辺に限られるもの																	
障 害 の 状 態																	
⑬ 血液・造血器 (平成 年 月 日 現症)																	
1 臨床所見									2 血液検査成績 (平成 年 月 日)								
(ア) 自覚症状									(イ) 骨 髄								
疲 労 感 (無・有・著)									有 核 細 胞 × 万 / μl								
動 悸 (無・有・著)									巨 核 球 / μl								
息 切 れ (無・有・著)									赤 芽 球 %								
発 熱 (無・有・著)									顆 粒 球 %								
関 節 症 状 (無・有・著)									リンパ球 %								
易 感 染 性 (無・有・著)									病的細胞 %								
(イ) 他覚所見									顆粒球(G)と赤芽球(E)との比 (G/E)								
リンパ節腫脹 (無・有・著)									リンパ球 / μl								
出血傾向 (無・有・著)									病的細胞 %								
紫 斑 (無・有・著)									血 小 板 × 万 / μl								
肝 腫 (無・有・著)									網赤血球数 %								
脾 腫 (無・有・著)									血清総蛋白 g/dl								
3 輸血の回数及び総量									(ウ) 出血傾向								
回 計 ml									出血時間 (法) 分								
(平成 年 月 日 ~ 平成 年 月 日)									A P T T (基準値 秒) 秒								
4 凝固因子製剤輸注の回数及び量									(エ) その他								
回 計 ml									CRP 検査値								
(平成 年 月 日 ~ 平成 年 月 日)									LDH 施設基準値 検査値								
5 造血幹細胞移植									6 その他の所見								
無・有 (平成 年 月 日)																	
経過 (																	

本人の申立ての場合、それを聴取した年月日を記入してください。

(お願い) 太文字の欄は、記入漏れがないように記入してください。

本人の障害の程度及び状態に無関係な欄には記入する必要はありません。(無関係な欄は、斜線により抹消してください。)

1 検査成績				
検査項目	検査日	単位	・ ・	平均値
CD4陽性Tリンパ球数		/ul		

検査項目	検査日	単位	・	・	・
白血球数		/ μ l			
ヘモグロビン量		g/dl			
血小板数		万/ μ l			
HIV-RNA量		コピー/ml			

①1日1時間以上の安静臥床を必要とするほどの強い倦怠感及び 易疲労感が月に7日以上ある	(有・無)
②病態の進行のため、健康時に比し10%以上の体重減少がある	(有・無)
③月に7日以上不定の発熱(38℃以上)が2ヶ月以上続く	(有・無)
④1日に3回以上の泥状ないし水様下痢が月に7日以上ある	(有・無)
⑤1日に2回以上の嘔吐あるいは30分以上の嘔気が月に7日 以上ある	(有・無)
⑥動悸や息苦しくなる症状が毎日のように出現する	(有・無)
⑦抗HIV療法による日常生活に支障が生じる副作用がある (①～⑥の症状を除く)(抗HIV療法を実施している場合)	(有・無)
⑧生鮮食料品の摂食禁止等の日常生活活動上の制限が必要である	(有・無)
⑨1年以内に口腔内カンジダ症、帯状疱疹、単純ヘルペスウイルス感染症、 伝染性軟属腫、尖圭コンジローム等の日和見感染症の既往がある	(有・無)
⑩医学的理由により抗HIV療法ができない状態である	(はい・いいえ)

はい ・ いいえ

検査項目	検査日	単位	・	・	・
血清アルブミン		g/dl			
AST (GOT)					
ALT (GPT)					
プロトロンビン		%			
時間		延長秒			
総ビリルビン (※)		mg/dl			

食道静脈瘤	無	・ 有	(内視鏡による、X線造影による、その他())
肝硬変	無	・ 有	(代償性、非代償性)
肝細胞癌	無	・ 有	
肝性脳症	無	・ 有	(1年以内に発症したことがある)
腹水	無	・ 有	・ 著
消化管出血	無	・ 有	(1年以内に発症したことがある)
ビリルビン値の上昇をきたす薬剤の使用	無	・ 有	

[illegible]

R/脳槽シンチグラフィーにて、髄液漏出所見
腰椎部での髄液漏出

(4) 自己導尿の常時施行 無・有 開始年月日: 平成 年 月 日
終了年月日: 平成 年 月 日

(5) 完全尿失禁状態 無・有 (カテーテル留置: 平成 年 月 日)

(6) その他の手術 無・有 () 平成 年 月 日

記銘力・集中力の低下があり、事務作業も困難である。倦怠感も強くあるため、肉体的労働にも時間的な制約があり、休み休み、かつ短時間しか続けられない。日常生活も、日中臥床していることが多い状態。

現在加療を続けているが、著明な改善が見られない。予後不良の可能性が高く、現在の病状で後遺症になると思われる。

醫師氏名 ○ ○ ○ ○ 印

<脳脊髄液減少症 3級>

(付 記)

- 本例は、初診日が平成25年1月22日であるので、障害認定日は1年6月後の平成26年7月22日となる。

この診断書の障害の状態は、平成26年7月26日現症のもので、障害認定日以降3月以内の診断書であるので、障害認定日の障害の状態はこれで確認できる。

- 傷病は脳脊髄液減少症であるので、診断書⑧～⑩、⑫、⑮1、⑯、⑰欄は必ず記載されていなければならない。
- 医師から、日常生活に関する指導が行われている場合は、⑨欄にその内容を記載してもらうこと。
- ブラッドパッチ等が行われている場合は、⑨「手術歴」欄に記載してもらうこと。
- 脳脊髄液減少症に関する検査が行われている場合は、⑮1(2)欄に検査の内容と結果を記載してもらうこと。
- ⑯欄には、どのようなことに生活の不自由さが生じているか、日中どのくらい就床しているか等、日常生活の状況や労働能力について、できるだけ詳しく記載してもらうこと。

■ 認 定

検査の結果、脳脊髄液の漏出が認められたため、ブラッドパッチ等を行ったが、症状の改善が若干にとどまっており、起立性頭痛等の症状が残存した状態になっている。

これらの症状により、日中の50%以上は起居しているものの、労働の内容や時間の制約を受けていることから、「労働が著しい制限を受けるか、又は労働に著しい制限を加えることを必要とする程度のもの」に該当すると認められるので、3級12号と認定される。